

秋月神社の敷地内に生えた竹を切る参加者



まつり実行委と碧い海の会



傷つき自ら命
たれた武将が祭ら
る秋月神社

大野川合戦の歴史 後世へ 秋月神社の境内整備

大分市大南地区の大野川合戦まつり実行委員会(中山忠義委員長)はNPO法人・碧い海の会(田中新正理事長、三十人)の協力を得て十八、十九の両日、秋月神社(同市中戸次)の荒れた境内を整備した。同神社には、合戦で傷つき自ら命を絶った武将が祭られている。境内で伐採した竹は祭りで竹灯籠に利用する。

同神社は同川左岸の大南大橋のたもとにある。一五八六(天正十四)年、近くの河川敷で大友・四国連合軍と島津軍が激突する「大野川(戸次河原)の合戦」があった。ふたをしてい

この時、負傷した筑前秋月藩の武将が「敵に首を取られるよりは」と、枯れ井戸に身を投げた。その後、井戸にきれいな水がわいたことから、村人が武将を供養し、感謝を表すために神社を建てたと伝えられる。井戸は今も参道の入り口に

伐採した竹灯籠に利用

神社は、祭り会場となる大野川の近くにあるが、でスポットライトられることはな実行委員会事市内で里山保全り組む同会は「史を伝える貴いものに、やぶに元の人以外にないのは残念やぶを「撤去」に。

事務局や同会、さらに地元、わって二日間、えた竹を伐採し、事務局は、こ月八、九の両日目に催す「よい火」で、帆足本前広場(同市戸や街路に並べる作業をした同修一さん)は、こまつに神社で